

平成27年7月7日(火)

老球の細道144

「コーチ」を天職と考えている人へ

・・・『クリエイティブ・コーチング』(大修館)書評より・・・

会津バスケットボール協会 室井 富仁

7年前になるだろうか。大修館出版社からスポーツのコーチングについて書かれた『クリエイティブ・コーチング』(ジェリー・リンチ著、水谷豊他訳)という本の書評を依頼されたことがある。すでに読み終えていたので、さらに精読するグッドタイミングだと思いきり引き受けてしまった。下記がその時の書評の内容である。

「コーチ」の重要性が叫ばれている昨今、「コーチ」に燃えている人、これから燃えようとしている人はこの書籍を買い求め、むさぼるように読んでほしい。バスケットボール関連の内容が盛りだくさんである。

【アメリカの格言に「ライオンに導かれたシカの軍隊は、シカに導かれたライオンの軍隊を破る」というものがある。スポーツも同じ。有能なコーチに導かれた選手、チームは、スポーツのすばらしさを知り、自分たちの望むような結果を出す。

私は県内レベルの高校バスケットボールチームを30年以上に渡ってコーチをしている。素晴らしい選手に恵まれても勝たせられない。真面目に努力している選手をもなかなか十分に伸ばしきれない。私のチームの選手たちは、まさにシカに導かれたライオンたちのようである。コーチとしてそんな屈辱を感じながら毎日悶々とした中で、ふと出会ったのが本書である。

選手を馬車馬の如く走らせ、ミスには烈火の如く怒鳴り散らす。選手の都合など考えないで、厳しいだけの練習をコーチのアイデンティティとして自己満足をしていた。長い間そんなコーチングスタイルをとっていた私にとって、本書の内容は目から鱗どころではなく、全身から鱗がはがれ落ちた。コーチはどうあるべきか? コーチとしての存在に、根が地中深くまで伸びていった確かな手応えを感じた。

本書の内容は三つの大テーマにまとめられている。「リーダーシップを育む」「掲げた目標へ導く」「競技力をさらに発揮させる」。どのテーマにも実践的で具体的な手立てが盛りだくさん。また、歴史に残る世界的なトップコーチ、トッププレイヤーの珠玉の名言が随所に散りばめられている。特に、バスケットボールのコーチの神様と称される元 UCLA コーチ、ジョン・ウッドンの言葉には襟を正せられる。

「コーチとしての自分の責務は、選手が人間としてもっている可能性を極限まで引き出すことであって、バスケットボールはそれを達成するための『一介のゲーム』にすぎない」

本書に記されたコーチングの手立てには試したいことがたくさんある。その中で、チームの雰囲気良くし、結束力を高める『容認の輪』という方法をこの夏の県大会で試してみた。チーム全員が車座になって、隣に座っている仲間の長所(プレー、性格、行動等)について2分間語り続ける。そしたら奇跡が起こった。誰もが勝てないとあきらめていたチームに勝ってしまったのである。今までになく試合の大事な場面で練習通りのプレーができ、逆転されかかった時もチームはまとまり、最後まで集中力を切らさなかった。前夜の宿舎でのミーティングで実施した『容認の輪』が多分に影響を与えたと信じている。

幕末の思想家、教育家であった吉田松陰は松下村塾を開き、歴史に残る幾多の人材を輩

出した。彼は幽閉生活の中でも一緒に獄中にいた罪人たちを紳士、淑女として日常的に接し、絶大なる尊敬と信頼を得たという。彼のその人間性が幕末の偉人たちを育成した。人を育てる原点はお互いの尊敬と信頼である。スポーツの選手とコーチも同じ。選手を育てることは人間として育てることであり、人生を教えることである。コーチは人間として尊敬され、信頼できる魅力的な存在として日々成長しなければならない。そうであればコーチングなどは成立しないと本書は教えてくれる。

「今の自分は停滞気味だ」と感じているコーチにとって、本物のコーチングへの再度燃えるために絶好である。今から30年前に本書に出会いたかった】